

## 自己有用感をもった子どもを育てる学級活動の在り方 ～チャレンジ活動を通して～

### 要約

日本人は、諸外国と比べて、自尊感情が低い。それは、日本は、「謙虚であることが美德」とされる風土があるからと考えられている。また、本学級で実施した学級力アンケートの結果から、本学級の自己有用感の低い。自己有用感、自尊感情の一部に位置付けられる。自己有用感を高めることは、自尊感情を高めることにも繋がる。自己有用感、社会性の基礎である。「他人の役に立った」「他人に喜んでもらえた」等、他者の存在なしには生まれない。そこで、集団活動を通して自己有用感を高めることを目指した。また、本学級は、学級全員で目標を共通理解していなかった。さらに、これまでの私の学級活動の指導は、学級全員で一つの目標に向かっていなかったことが課題であった。そこで、一人ひとりが目標を持ち、その目標を全員で共有する活動を行わせ、全員が目標を達成することができるような指導を行った。また、目標に向けて、助け合いの観点を入れて活動を行い、本研究主題を設定した。

そこで、本研究実践は、次の三点から行った。

- (1) 自己有用感をもった子どもを育てるための題材と年間指導計画への位置付け
  - ・学級目標「さんた」から年間指導計画を具体化し、題材を配列した。
- (2) チャレンジ活動を位置付けた学習過程の工夫
  - ・目標の設定、挑む活動、振り返る活動を一連の活動として行った。
- (3) 具体的支援の工夫
  - ・学級会ノートの作成、教師の声かけ、結果の可視化、時間の確保を行った。

実践Ⅰ「みんなでスポーツチャレンジ」では、成果として、苦手な子どもや得意な子どもがいる中で、応援をしたり、コツを教えたりして取り組むことができたが、課題として、クラス全体で目標を設定し、班を超えて助け合う機会が少なかったことが明らかとなった。考察として、目標を設定したことで、達成感と向上心を高めたが、学級全体での連帯感を高めることが不十分であった。

実践Ⅱ「課題解決チャレンジ」では、成果として、お互いが助け合って取り組むことができたが、課題として、個人で考えたときに、成功する人と失敗する人が明確で、一人ひとりにプレッシャーのかかる活動であったことが明らかとなった。考察として、全体での活動であったため、達成感と連帯感が高まったが、目標が常に同じであるため向上心を高めることが不十分であった。

以上の実践の結果から、次のような成果を明らかにすることができた。

- 目標設定を行い、目標を少し高く設定し、目標に向かってみんなで試行錯誤しながら取り組んだことで、連帯感が高まるとともに、より達成感を高めることに有効であったと考える。
- 実践ⅠとⅡの活動を行い、挑む活動と振り返る活動を繰り返し行ったことで、連帯感を高めることに有効であったと考える。
- 振り返り活動を位置付け、お互いのよさを交流したことで、向上心を高めることに有効であったと考える。

しかし、次のような課題が残った。

- より目標設定できる議題の選定
- 教師の支援の多様性

**キーワード** 達成感 向上心 連帯感

## 1 主題設定の理由

### (1) 現代社会の要請から

日本人は、諸外国と比べて、自尊感情が低い。それは、日本の「謙虚であることが美德」とされる風土があることが原因であると考えられている。しかし、自尊感情を高めるとは、これからの国際社会を生きる子どもたちにとって必要である。自己有用感、自尊感情の一部に位置付けられ、これを高めることは、自尊感情を高めることにつながる。自己有用感、社会性の基礎である。「他人の役に立った」「他人に喜んでもらえた」等、他者の存在なしには生まれてこない。そこで、集団活動を通して自己有用感を高めることを目指し、本研究主題を設定した。このことは、自他を大切にし、社会の形成者の資質を育てる上からも意義深い。

### (2) 特別活動の特質から

新学習指導要領では、特別活動の目標が「複雑で変化の激しい社会の中で求められる能力を育成する」という視点から、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つに整理された。特に、「自己実現」の観点では、必要な資質・能力を、「自己理解を深め自己のよさや可能性を生かす力」「自己の在り方生き方を考え設計する力」が示されている。自己のよさや可能性を生かす力やよりよい生き方を考えていく力は、まさに、自己有用感のことである。このことから、自己有用感をもった子どもを育てる上で意義深い。

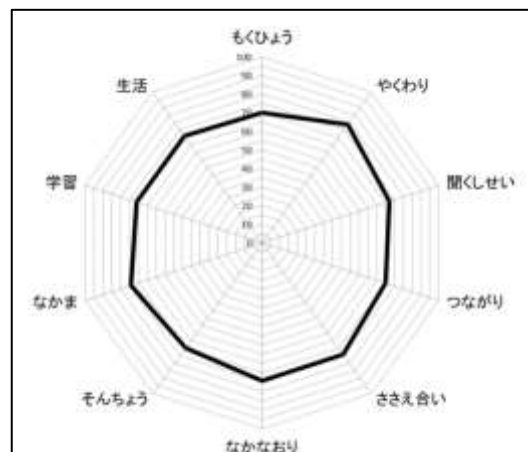
### (3) 児童の実態及びこれまでの指導の反省から

図1は、本学級で実施した学級力アンケートの結果である。これを見ると、「やくわり」（係や当番の活動に進んで取り組む学級のこと）が高い反面「もくひょう」（みんなで決めた目標やめあてに力を合わせて取り組んでいる学級のこと）には課題がある。これは、クラス全員で目標を共通理解していなかったことが原因であると考えられる。また、これまでの私の学級活動の指導は、学級全員で一つの目標に向かっていなかったことが課題であったと考える。そこで、一人ひとりが目標を持ち、その目標を全員で共有する活動を行わせ、全員が目標を達成することができるような指導を行う。また、目標に向かって、みんなで活動していく中で、助け合いの観点を入れて活動を行っていく。このことは、自己有用感をもった子どもを育てる上でも意義深い。

【表1 心と体の健康に関する調査結果 (%)】

国名	米国	中国	韓国	日本
私は価値のある人間だ	57.2	42.2	20.2	7.5
私は自分を肯定的に評価している	41.2	38.0	18.9	6.2
私は自分に満足している	41.6	21.9	14.9	3.9
自分は優秀な人間だ	58.3	25.7	10.3	4.3

(財) 日本青少年研究所の調査



【図1 学級力アンケート(5月)31名】

## 2 主題の意味

### (1) 主題「自己有用感をもった子ども」とは、

自己有用感とは、他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚である。本研究では、「達成感」「向上心」「連帯感」の3つから捉える。

そして、自己有用感をもった具体的な子どもの姿を、次の様に考える。

- 「できて嬉しい」と思う子ども【達成感】
- 「もっとやりたい」と自主的に行動をしている子ども【向上心】
- 「一緒にやりたい」「自分も貢献できた」と助け合う子ども【連帯感】

(2) 副主題「チャレンジ活動」とは、

一人ひとりが目標を立て、その目標を全員で共有し挑戦する。その成果を振り返り目標を修正してさらに挑戦していく一連の活動のことである。具体的には、「目標の設定」「挑む活動」「振り返る活動」をサイクル化して学級活動に位置付ける。

### 3 研究の目標

自己有用感をもった子どもを育てる学級活動を究明する。

### 4 研究の仮説

自己有用感をもった子どもを育てるために、以下の3点を工夫する。

- (1) 自己有用感をもった子どもを育てるための題材と年間指導計画への位置付け
- (2) チャレンジ活動を位置付けた学習過程の工夫
- (3) 具体的支援の工夫

### 5 研究の内容と方法

(1) 題材の設定の工夫と年間指導計画

自己有用感をもった子どもを育てるために、学級目標をもとに、学期ごとに具体化し、表2のように配列した。学級目標は、学校目標の（わかった・よかった・がんばった）であるさんた（3つの「た」）から学級目標も「さんた」として、子どもたちと話し合い次のように決めた。

表2 年間指導計画（達…達成感 向…向上心 連…連帯感）

学級目標：さんたを達成しよう（各学期の目標の頭文字をとり、3つの「た」でサンタ）			
学期	1学期	2学期	3学期
目標	たのしく	たすけあい	たいせつにする3の3
題材	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ めあて決め 向</li> <li>○ あいさつ月間 達</li> <li>○ お楽しみ会 連</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ みんなでスポーツチャレンジ 向</li> <li>○ 課題解決チャレンジ 達</li> <li>○ お楽しみ会 連</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 漢字学習チャレンジ 達</li> <li>○ お楽しみ会 連</li> </ul>

(2) チャレンジ活動を位置付けた学習過程

チャレンジ活動とは、一人ひとりが目標を立て、目標を全員に共有し、目標を達成するために集団で取り組み、成果を見直し、目標を再設定して達成していく一連の活動のことである。

表3 活動内容

	目標の設定	挑む活動①		挑む活動②	振り返る活動
活動	一人ひとりが目標を立て、目標を全員に共有する活動	設定した目標を達成するために集団で取り組む活動		新たに設定した目標を達成するために集団で取り組む活動	挑む活動の成果を見直し、新たな目標をもつ活動
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 活動内容決め</li> <li>○ 目標の設定</li> <li>○ 目標の共有</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 目標達成に向けて取り組む</li> <li>○ 声かけ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 目標の見直し・再設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 目標達成に向けて取り組む</li> <li>○ 声かけ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 活動の振り返り</li> <li>○ 交流</li> </ul>

目標の設定とは、集団で取り組む活動内容を決め、一人ひとりが目標を立て、集団で目標を共有す

ることである。

挑む活動とは、設定した目標を達成するために集団で活動に取り組むことである。

振り返る活動とは、成果を見直し、新たな目標を持つ活動のことである。

### (3) 教師の具体的支援

学級会ノートの作成 ・意見を事前を書くためのノートの準備

・丸付けやコメントを書く。

教師の声かけ

・応援…頑張っているときには応援をする。

・称賛…目標を達成した時には称賛をする。

・助言…達成するためのアドバイスをする。

結果の可視化

・結果が分かりやすいように可視化する。

時間の確保

・活動を行うための時間の確保をする。

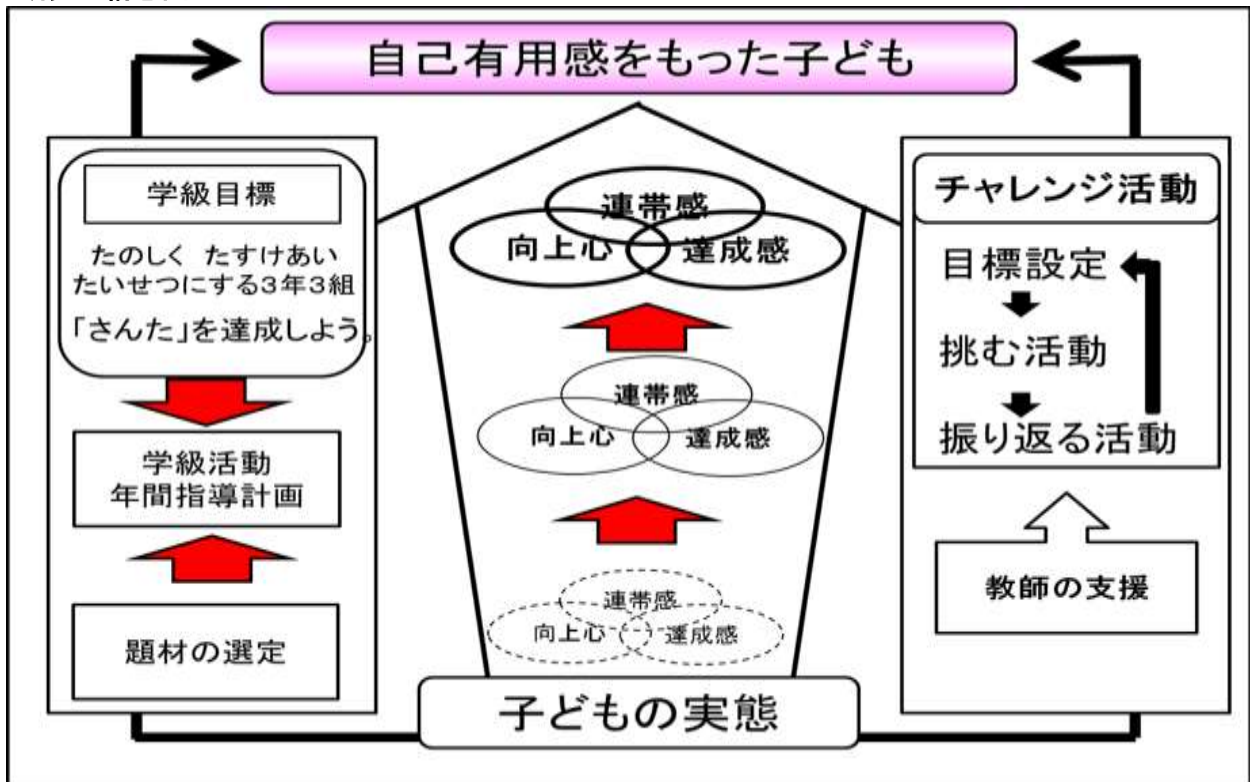
・目標の設定・共有の時間の確保をする。

## 6 研究計画

【表4 研究計画】

月	研究内容	月	研究内容
5月	研究主題の設定、実態把握	10月	検証授業1及びデータ収集・分析
6月	理論研究	11月	検証授業2及びデータ収集・分析
7月	理論研究	12月	研究のまとめ
8月	仮説の設定	1月	研究のまとめ
9月	題材分析、指導案作成	2月	研究報告

## 7 研究の構想図



【図2 研究構想図】

## 8 指導の実際

### 実践Ⅰ「みんなでスポーツチャレンジ」(10月実施)

#### (1) 目標

- クラスみんなで「みんなでスポーツチャレンジ」について意欲的に話し合い、目標をみんなで共有し、目標に向けてみんなで取り組む態度を育てる。
- 集団で目標に向かって助け合いながら活動することができ、友達のよさや自分のよさについて話し合う活動を通して、よさを認め合うことができるようにする。
- みんなで目標を達成するために、個人や集団で練習を継続的に行おうと意欲的に参加できるようにする。

#### (2) 研究の仮説

##### ① 題材について

達成感：グループで目標を設定し、目標達成することで達成感を味わうことができる。

向上心：目標を再設定していくことで向上心を持つことができる。

連帯感：みんなで目標を達成しようとすることで連帯感を持つことができる。

##### ② チャレンジ活動を位置づけ

本題材においては、表5のようにチャレンジ活動を位置付けた。

【表5 チャレンジ活動を具体化】

	目標の設定	挑む活動①		挑む活動②	振り返る活動
ドッジボールラリー活動	○グループ決め ○目標回数 の設定 ○目標回数 の共有	○目標達成に 向けてドッ ジボールラ リーの練習	○目標回数 の再設定	○目標達成に 向けてドッ ジボールラ リーの練習	○ドッジボール ラリーの活動 を終えての振 り返り ○友達の良さを 交流
なわとびチャレンジ活動	○グループ 決め ○跳ぶ中身 の設定 ○目標回数 の共有	○目標達成に 向けてなわ とびの練習	○跳ぶ中身 の再設定 ○目標回数 の再設定	○目標達成に 向けてなわ とびの練習	○なわとびチャ レンジの活動 を終えての振 り返り ○友達の良さを 交流

##### ③ 教師の具体的支援

- ・学級会ノートの作成として、学級会で発表しやすいように事前に考えを作っておくためのノートを作成する。また、自信を持って発表できるように丸付けやコメントを書く。
- ・教師の声かけとして、ドッジボールラリーやなわとびチャレンジの活動を行っている時に、応援をする。また、グループでの目標を達成できた時には、称賛をする。さらに、達成できなかったり、回数が伸び悩んでいた時には、助言を行う。
- ・結果の可視化として、ホワイトボードを用意し、結果が常に分かるようにしておく。
- ・時間の確保として、体育の初め5分間を練習の時間にあてたり、学級活動の中で、練習の時間の確保を行ったりする。

#### (3) 実践事例Ⅰの実際

##### ① 目標設定 (事前)

子どもたちの中から「みんなで助け合える活動がしたい」という意見が出され、「みんなでスポーツチャレンジ」という議題が選定された。議題の中身は、教師から「目標を持ってみんなで目標に向かって活動するのはどうか」と問うと、子どもたちは、「それがいい」と言ったため、目標設

定のできる「ドッジボールラリー」か「なわとびチャレンジ」の2つから決めることになった。

## ② 目標設定（学級会）

話し合い活動では、事前に考えを作っていたので、全員が自分の考えを進んで発表することができた。

学級会ノートには、「みんなと一緒に練習すると上手になれるから賛成」や「捕るためのコツを教えてあげられるから賛成」と助け合いを意識して書いた。しかし、具体的な助け合いの方法や反対意見の解決策を進んで発表することができていなかった。そのため、「ドッジボールラリー」と「なわとびチャレンジ」の両方をするという集団決定になってしまった。

## ③ 挑む活動（事後）

ドッジボールラリーでは、男女混合の4つのグループに分かれて行った。目標の設定をどのチームも10回と設定した。一週間ほど続けたが、5回続くのがやっとの状況であった。そこで、振り返る活動を位置づけ、どのようにしたら続くのかグループごとに考えさせた。その中で、2グループは、「相手がとりやすくするために下から投げる。」という意見が出た。残りの2つのグループは、「コツを教えてもらおう」という意見がでた。そこで、教え合いの時間を設け、次の週に実践していくと、どのグループも15回ほど続くようになった。【写真1】そこで、新たな目標として、それぞれのチームで話合って目標回数を決めた。（①：30回 ②：25回 ③：30回 ④：25回）その中でも、下から投げることを意識したグループは、回数をどんどん伸ばし、40回程続くようになった。そこで、自分のグループに限らず、クラス全体での教え合いを行った。その中で、「下から投げるといい。」という意見から、どのグループも下から投げて挑戦した。すると、最後のチャレンジでは、99回続くグループや81回続くグループがいた。また、下からだけではなく、図3のように苦手な子どもに対して、実演しながらコツを教えている姿が見られ、助け合おうとする姿が多く見られた。なわとびチャレンジでは、6つの班に分かれ、班のみんなまで100回を目標にチャレンジした。【写真2】跳び方を変えて100回という目標を行った。前跳びでは、簡単であった目標がどんどん難しくなり、目標を超えることができないグループが出てき始めた。そこで、話し合いの時間を設けた。すると、「コツを教える。」「苦手な人の分まで頑張る」という教え合いや支え合いの言葉が出た。そこで、教える時間を設け、目標に向かって取り組んだ。すると、少しずつではあるが、回数に伸びが出てきた。また、【写真3】のようにドッジボールラリーやなわとびチャレンジでもみんなで行き届く際に円陣を組んで「頑張るぞー！！」と意気込んで取り組むことができた。【写真4】のように、班にホワイトボードを用意し、今までの最高記録と今日の記録を記入させ、回数の伸びが分かりやすいように結果の可視化を行った。



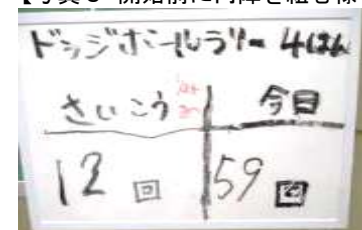
【写真1 教え合いの様子】



【写真2 なわとびの練習】



【写真3 開始前に円陣を組む様子】



【写真4 結果の可視】

#### ④ 振り返る活動（事後）

集会活動を終えての振り返る活動では、それぞれの班での助け合いについてどんなことがあったのか意見交流を行った。名前を出してみんなで共有した。得意な子どもだけではなく、苦手な子どもも助け合えたことに触れた。

子どもたちの感想では、「〇〇くんのコツを教えてもらって上手くキャッチできるようになった。」「とりやすいように投げ合うことができた。」「僕が、失敗したときにおいしいと声かけをしてくれて嬉しかった。」という感想がでた。その中で、得意な子どもがコツを教えたり、どのようにしたら続くのか考えてくれたりと得意な子どもに目が行きがちなか中、一人の子どもが、「苦手な友達も一生懸命頑張っていた」という意見で子どもたちが「確かに。」と言ったことで、苦手な子どものことにも目を向けることができていた。この意見交流の後、4グループ全部がまだこの活動を続けたいと言ったため、2学期、3学期と続けていった。

#### (4) 考察

目標設定では、全員が書いた内容を発表することができ、みんなでよりよいものをしようとすることができていたと考える。挑む活動では、目標回数を決め、目標を超えられるようにと取り組むための活動として良かったと考える。また、苦手な子どもや得意な子どもがいる中で、応援をしたり、得意な子どもが苦手な子どもにコツを教えたりして取り組むことができたと考える。振り返る活動では、個人名を出し、よさを全体交流することで、グループ内でしか分からないよさも知ることができたと考える。しかし、課題として、2つの活動をするとなり、練習する時間が足りなかったと考える。また、班での活動であったため班での助け合いをすることができたが、クラス全体でとなるとなかなかできておらず、クラス全体で目標を設定し、班を超えて助け合う機会が少なかったと考える。その課題を解決するために、グループでの目標ではなく、クラス全体で行うことがより有効であると考えた。

### 実践Ⅱ「課題解決チャレンジ」（11月実施）

#### (1) 目標

- クラスみんなで助け合って「課題解決チャレンジ」をつくることに興味を持ち、自分たちができていないことをできるようにするために、みんなで目標に向かって頑張ることができるか意欲的に話し合い、みんなで目標に向かってチャレンジできる態度を育てる。
- 話し合いの観点をもとに、できていないことができるようになるためには、どのようにしたらいいのか考えながら助け合って、「課題解決チャレンジ」を実践することができるようにする。
- 自分の意見を進んで発表したり、友達の意見を聴いたりして話し合いを行い、できるようになったことの喜びを実感し、友達と助け合うことのよさを再確認できるようにする。

#### (2) 研究の仮説

##### ① 題材について

達成感：クラスで目標を設定することで目標を達成する際に達成感を味わうことができる。

向上心：目標達成が何度もできるようにと向上心を持つことができる。

連帯感：目標に向けてみんなで頑張ろうや助け合おうという連帯感を持つことができる。

##### ② チャレンジ活動を位置づけ

本題材においては、表6のようにチャレンジ活動を位置付けた。

【表6 チャレンジ活動を具体化】

	目標の設定	挑む活動①		挑む活動②	振り返る活動
給食残りゼロチャレンジ活動	○残菜をなくす目標設定 ○目標の共有	○残菜をなくす取り組み	○活動の仕方の再設定	○残菜をなくす取り組み	○給食残りゼロチャレンジ活動を終えての振り返り ○友達の良さを交流(手紙)
		<b>振り返り</b>			

③ 教師の具体的支援

学級会ノートの作成として、学級会で発表しやすいように事前に考えを作っておくためのノートを作成する。また、自信をもって発表できるように丸付けやコメントを書く。

教師の声かけとして、活動中に「あと少し」「頑張れ」と応援をする。また、残菜がなくなった時には、称賛をする。さらに、達成できなかった時には、助言を行う。

結果の可視化として、全体の表を掲示することや個人の表を作り結果が常に分かるようにする。

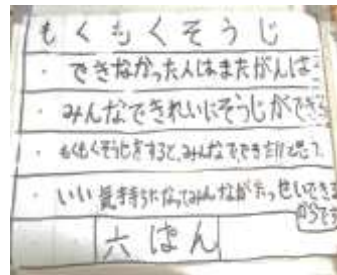
時間の確保として、給食時間や振り返り活動の時間の確保を行う。

① 目標設定(事前)

子どもたちの中から、「またみんなで助け合いをしたい」という意見が出され、「課題解決チャレンジ」という議題が選定された。議題の中身は、教師から「前は遊びの活動であったので、次は生活の事でチャレンジするのはどうか」と問うと、子どもたちは、「それでいい」と言ったことから、生活面の課題について話し合いを行った。すると、給食の残り物が多いことと、掃除の時間に話している人がいるという課題が出た。そこで、目標設定として、「給食残りゼロチャレンジ」か「もくもく掃除チャレンジ」の2つで話し合うことになった。

② 目標設定(学級会)

学級会ノートを作らせ、今回の学級会では、一人ずつの意見を聞いていくのではなく、班で行い、班の中で全員が意見を出し、ホワイトボードにまとめるという時間を設けた。子どもたちの意見として、もくもく掃除チャレンジでは、「みんなでできたと思えるから」「また頑張ろうと思えるから」という意見が出され、給食残りゼロチャレンジでは、「全員が全部食べることで嬉しくなり、またみんなで頑張ろうと思えるから。」「みんなで協力することができるから」という意見が出た。



【写真5 班での話し合い(もくもくそうじ)】

班での話し合いを行い、意見をまとめることで、班の中で一人ひとりの意見に耳を傾けて聞くことができ、まとめるときに他の意見と比べながらまとめた。その後の全体交流では、友達の賛成意見に対する賛同や反対意見に対する改善策を発表することができたことで、意見の変容が見られた。

③ 挑む活動(事後)

給食残りゼロチャレンジの活動では、全員で給食の残りをなくそうという目標を持って取り組んだ。また、給食を食べ終わった子どもに対して、スタンプとシールを貼り、意欲付けを図った(図3参照)。さらに、全体に掲示する表を作成し、その表にもスタンプやシールを貼るとともに、残菜がどれほどあったのか栄養教諭に聞いて表に記入

きゅう食0チャレンジ

11月15日	11月16日	11月17日	11月20日	11月21日
11月22日	11月24日	11月27日	11月28日	11月29日
11月30日	12月1日	12月4日	12月5日	12月6日
12月7日	12月8日	12月11日	12月12日	12月13日
12月14日	12月15日	12月18日	12月19日	12月20日
12月21日				

名前(はな) 陽)

【図3 個人の表】



## し、視覚化を行った【写真6】

初めは意欲を持ち取り組んだため、3日間は残菜がなかった。しかし、その後、3日間続けて残菜が出た。そこで、振り返る活動の時間を設けた。振り返る活動の中で、「話をしすぎてご飯がなかなか食べ終わらない人がある。」「給食の準備をもっと早くして食べる時間を増やした方がいい。」という意見がでた。そこから、準備の時間を短くすることと最初の10分間は黙々と食べるという意見が出た。この2つに取り組みながら給食残りゼロチャレンジを行った。全員で残菜をなくそうという目標に向かって取り組んでいく中で、給食が苦手な子どもも給食を残さないように頑張ると言って残さず取り組んでいた。【写真6の全体の表】を見ると分かるように、全26日の取り組みの中で、21日間成功することができた。残菜が出る日もあるが、ほとんど毎日残菜を出さないように取り組むことができた。取り組みの中で、給食が大好きな子どもは、たくさんの量を食べたり、給食が苦手な子どもは、減らすことはあるが、少しでも食べようとしたり姿が見られた。取り組みの前には、増やすことをしなかった子どもたちが増やす姿が見られ、みんなで頑張ろうという意識を持ちながら取り組んだ。

【写真6 全体の表】

④ 振り返る活動 (事後)

今回の振り返る活動では、全体交流で行うのではなく、給食時には、班で食べるので班の中でその人のよさを見つけさせた。そのよさを手紙形式で記入させ、振り返り活動を行った。子どもたちの感想の中で、「嫌いなものを一生懸命食べていていいね。」「いつも残さず食べていてすごいね。」「一緒に給食を食べられたから苦手なものも食べられたよ。」「魚が苦手なのに一生懸命食べられてすごいね。これからもがんばってね。」「残りが合ったらいつも食べてくれてありがとう。」「助け合うためにいっぱい増やしてすごいね。」という感想を書いていた。



【図4 振り返る活動での手紙】

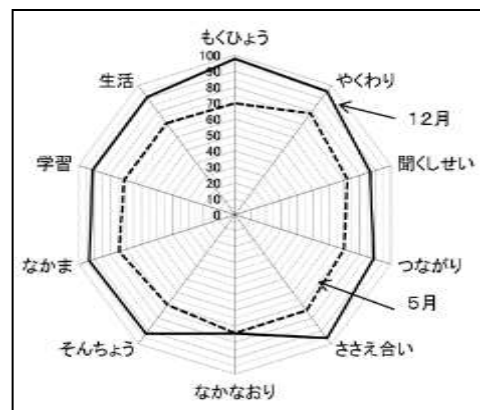
## ⑤ 考察

目標設定では、班での話合いを取り入れたことで、友達の見解に対する賛成・反対の意見交流に時間をかけることができたのでよかったと考える。挑む活動では、給食が苦手な子どもも残さず頑張ろうとしたり、給食が好きな子どもは、たくさんの量を食べたりと、お互いが助け合って取り組むことができ、自己有用感を高める活動として、成果の見える活動であったと考える。振り返る活動では、前回の課題を生かし全員のよさを手紙に書かせることで、全員が友達からよさを見つけてもらえたので、よりよい振り返り活動であったと考える。しかし、課題が残った。給食残りゼロチャレンジは、個人で考えたときに、成功する人と失敗する人が明確で、どちらかしかないために成功しなければというプレッシャーになることもあるのではないかと考え、活動として、みんなで成功かみんなで失敗かという活動をした方が有効であったと考える。

## 9 全体考察

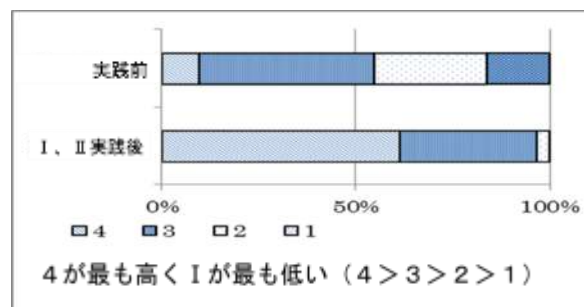
アンケート結果を見てみると、図5のように5月から比べて、学級力アンケートの結果が高まっていることが分かる。実践を2つ通して、子どもたち同士で声かけや助け合いを進んですることができ、振り返る活動の中でも、友達のよさをしっかり見つけ、振り返ることができていた。また、

得意な子どもと苦手な子どもがいる活動を行うことで、得意な子どもが苦手な子どもに対してアプローチすることで、挑む活動や振り返る活動の中で、自分が役に立っていると気付く機会があり、自己有用感を高める活動としてよかったと考える。特に、ドッジボールラリーやなわとびチャレンジの活動では、得意な子どもが率先して、苦手な子どもに対して教えている場面が多く、子どもたち同士の関係づくりにもつながり、そこから自己有用感の高まりにつながったと考える。給食残りゼロチャレンジでは、給食が好きな子どもが積極的に増やすことで、残菜がなくなる日数が多く、自分が頑張っているから残りがなくなったと思え、自己有用感を高めることにもつながったと考える。しかし、活動の中身として、ドッジボールラリーやなわとびチャレンジのように、グループ全員で何回と決める活動の方が、給食残りゼロチャレンジのような、個人での成功が鍵となる活動よりも有効な手立てではないかと考える。



【図5 学級カアンケート5月と12月の比較】

本研究である自己有用感について、【図6】を見ると分かるように最も高い4をつけた子どもの割合が実践前には、20%にも満たない割合だったにも関わらず実践IとII終了後には、割合が半数を超える結果となった。また、最も低い1の割合が実践前には、20%程度の割合だったが、実践IとII終了後には、一人もいない結果となった。このことから、本研究で行った実践は、有効であったと言える。



【図6 自己有用感アンケート 実践前後比較】

## 10 研究の成果と課題

### (1) 研究の成果

研究の結果、次に示す3点が成果として明らかになった。

- 目標設定を行い、目標を少し高く設定し、目標に向かってみんなで試行錯誤しながら取り組んだことで、連帯感が高まるとともに、より達成感を高めることに有効であったと考える。
- 実践IとIIの活動を行い、挑む活動と振り返る活動を繰り返し行ったことで、連帯感を高めることに有効であったと考える。
- 振り返り活動を位置付け、お互いのよさを交流したことで、向上心を高めることに有効であったと考える。

### (2) 今後の課題

しかし、次のような課題が残った。

- より目標設定できる議題の選定
- 教師の支援の多様性

### 〈参考文献〉

- |                          |                                |         |       |
|--------------------------|--------------------------------|---------|-------|
| 文部科学省                    | 小学校学習指導要領解説特別活動編               | 東洋館出版社  | 2008年 |
| 文部科学省                    | 生徒指導提要                         | 教育図書    | 2010年 |
| 福岡県教育センター                | 鍛える教育                          | モリタ綜合印刷 | 2014年 |
| 神谷 和宏                    | コーチング・アプローチ                    | 明治図書    | 2017年 |
| 福岡県教育庁教育企画部企画調整課         | 鍛ほめ福岡メソッド                      |         | 2015年 |
| 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター | 生徒指導リーフレット「自尊感情？」それとも、「自己有用感？」 |         | 2015年 |